

# 館報

No.26

1982.6.

就任 あいさつ

退任 あいさつ

名著講読の発足にあたって

附属図書館業務電算化  
検討部会からの報告

## 就任 あいさつ

小林 茂

近年、本学附属図書館は急速に近代化されましたが、さらに電算化等の変革が行われようとするこの重要なときに、浅学非才の私が附属図書館長の椅子をけがすことになり、その責任の重大さを痛感いたしております。この重責を全うするため、全力を尽す覚悟でございますが、関係各位みなさま方にも御指導と御協力を賜りますよう衷心よりお願いする次第です。

顧みますと、私が附属図書館と関わりを持ちましたのは、昭和41年、その運営委員に選出されて以来でございます。当時の本館は新築の学生会館の隣りの古ぼけた木造二階建の建物で、階下の会議室も薄暗い陰気な部屋でした。運営委員として私が初めて出席したのは、学生会館の会議室にて当時の宮城館長（教育学部）が議長となって開催された運営委員会で、附属図書館の建物新営について、その設計図面などの説明があったことが、つい先日のように鮮やかに思い出されます。その本館が昭和46年に旧館の3.5倍の広さをもつ鉄筋コンクリート造の建物(延面積 3,484 m<sup>2</sup>)に生れ変わったときには、当時運営委員であった私にとって特に、感無量でした。その他、当時の忘れ得ない思い出としては、文部省の指定図書制度発足第3年目、昭和43年度に本学にも指定図書購入費(287万円)が配分されたこと、学園紛争当時には、学生から図書館の開館時間延長や休日開館などを迫まれて、苦慮したこと、また昭和46年度に、長い論議の末、Science Citation Index (S C I)(1971)(自然、社会科学の世界専門誌の索引誌)(1ヶ年のみ)の購入を決定したことなどがあげられます。

さて、本年5月7日に出席した第30回中国四国地区大学図書館協議会総会(広島大学)の国立大学部会では、(1)国立大学図書館協議会会費改訂、(2)国立大学図書館協議会賞に関する諸規程の一部改正、(3)図書館職員の旅費の増額、(4)図書館維持費(文部省より配分される図書館のクラス別維持費予算で、本学図書館はCクラス)の増額、(5)図書館定員の増員、などについての協議題が、討論されました。ところが、このうち(3)、(4)および(5)の議題はすでに、第12回同協議会(島根大学)昭和39年当時から継続して審議されていることを知り、この地区の附属図書

館が長い間、同じような未解決の問題で、苦境に立たされているのかと驚いた次第です。たとえば、本学の図書館の蔵書冊数は昭和57年3月で44万冊と、昭和42年当時の2.4倍の伸びを示し、また、教官定員では昭和56年は、749名と当時の1.5倍の増加であるのに対し、図書館定員は、昭和56年21名（他に、非常勤職員16名と時間外閲覧業務要員6名）で、昭和42年の定員20名（他に、非常勤職員11名）と比較して定員は殆んど変わらず、その代りに、非常勤職員が増加したために、人件費に図書館経費の約50%が当てられている状態であります。

しかしその間、各部局の御協力により、図書館の蔵書冊数は2.4倍に増加し、図書館の機械化も進み、複写装置、印刷、製本装置、マイクロ撮影装置、マイクロリーダー、通信装置（テレックス）、および視聴覚装置などが導入されました。また参考業務（図書館利用の案内、図書目録、索引抄録誌の使用法、文献調査および相互利用などのサービス）も実施され、また昭和53年より文献情報検索用の端末機（蔵本分館）(JOIS-I<sup>1)</sup>（日本科学技術情報センター(JICST)）のオンライン情報検索システムで、その当初のデータベースは、JICST理工学、C A S化学、MEDLARS医学などの文献ファイルであったのが、昭和56年に、JOIS-II<sup>2)</sup>となり、データベースが拡張改良されました。たとえば、MEDLARS ファイルが、MEDLINE ファイルに変更され、その補助ファイルが作成され、理工学文献ファイルでは英字の他にカナ漢字による打出しが可能となり、またBIOSIS（生物）ファイルが導入されました。近い将来、CANCERLIT（がん情報）およびINSPEC（電気、電子工学）などのデータベースも導入される予定のようです。]が活動している現状は当時からみると非常な進歩発展であると思えます。

当面の附属図書館の問題は、本館書庫の増築であります。このことについては、竹治前館長がすでに館報に述べられました<sup>3)</sup>ので、ここでは省略しますが、目下のところ書庫の図書が、書架に縦にならべるのではなく、横に積み重ねるような状態になりつつありますので、なるべく早く増築しなければならないと思っています。

今後の問題としては、図書館業務の電算化があげられます。一般的にこの機械化の対象となる図書館業務は、図書および雑誌の選書、発注、受入、目録、検索（参考）、貸出、会計の各種業務、雑誌の製本管理、文献複写サービスおよび各種利用統計などがあげられます。<sup>4)</sup>この電算化は図書館にとって、相当の難事業ですが、完成の暁には効率的なサービスができるものと考えています。

なお、これに関連して文部省の推進している「学術情報システム」があげられます。昭和59年に学術情報センターの設置が計画され、附属図書館もこのシステムに参加することになります。学術情報（原情報、一次情報、二次情報および三次情報）のデータベースが作成され、これがネットワークシステム（二次情報等のデータベースによる情報検索ネットワークと、目録、所在情報の形成とこれに関連する図書館情報処理のネットワークの2種類を有機的に統合したもの）に構成されて<sup>5)</sup>、各種データベースによる検索サービス等の実施が考えられているようですが、まだこれが実現するまでには相当の期間を要することと思えます。

本年秋頃には、本館にも情報検索用端末機を設置し、みなさま方のお役に立てる予定です。

以上、館長就任にあたり、図書館の近況などをご報告致しますとともに、今後の御協力をお願い申し上げます。

1) 徳島大学附属図書館館報 21, 8 (1980)

2) 同館報, 24, 5 (1981)

- 3) 同館報, 22, 1 (1980)
- 4) 昭和56年度学術情報センターシステム開発調査概要協力者会議報告 (昭和57年3月), 7,  
(文部省学術国際局情報図書館課発行)
- 5) 学術情報システム, 昭和55年度, (昭和56年6月)(文部省学術国際局情報図書館課発行)  
(附属図書館長)

## 退 任 あ い さ つ

竹 治 貞 夫

附属図書館長の重責を担って満二年、去る4月1日を以て任期を終了いたしました。その間大学各部局をはじめ、分館長・事務長以下館員の皆様の絶大な御援助と御協力を賜りまして、何とか職責を果たして行くことができました。ここに皆様の御芳情に対し、厚く御礼を申しあげます。

この2か年は予算的に成長のない停滞期であり、新しい事業を興して図書館の発展を図るといったようなことは、何一つできませんでした。しかし事務当局の御尽力によって、建物や施設の補修整備が着々と行われ、また館員の皆様の努力によって内容の充実とサービスの向上が図られ、更には又できるだけ多くの館員が研修や視察に出かけて、各自の資質の向上に努められました。これらのことは今後の図書館の充実発展に寄与するところが少なくないであろうと、期待する次第であります。

現在、図書館として避けることのできない問題は、業務上及び情報検索上の電算化・機械化であります。かつて18世紀の後半からヨーロッパに産業革命が起こり、それまでの手工業による小さな生産から、大規模な機械工場の生産へと転換し発展していったように、今や図書館の業務並びに全国的な規模でネットワークを組む情報検索の電算化が、実現されようとしております。

図書館という所は、一方では古色蒼然とした書籍や資料を保存整備して研究者の需要に応ずる仕事があり、又一方ではこのような時代の先端をゆく新しい機械にもとりくんで、情報化社会の要望に答えなければなりません。図書館員の仕事は誠に複雑で幅が広く、いろいろと苦勞の多いことではありますが、今後とも皆様が協力一致して事に当たられ、図書館の一層の向上発展に尽くされますようお願い申し上げます。

任を退くに当たって最も心残りなのは、本館の書庫を中心とする増築問題が、いまだ緒に就くに至らなかった点であります。本館は建築以来すでに10年を超え、書庫の収容力はやがて限度に達しようとしております。蔵書の増加のためにはもとより、最近推進されている雑誌類の集中化のためにも、また機械の設置や参考業務の拡張のためにも、既に十分に備わっている資格面積を活用して増築を行わなければ、今後の図書館の発展を望むことはできません。施設整備委員会による用地の決定が早期に行われ、増築が実現されることを切望してやみません。

今一つ今後の問題として提起しておきたいのは、学内から配分される図書館予算等を定率化することです。図書館予算は、毎年必要経費を運営委員会で審議し、その決定額から文部省配当の予算額を差し引き、残額を各学部の積算校費に割り当てて配分を受けております。従って、その配分率は事後に決まるわけではありますが、例年その率に大差がないように運営されております。

そこで一步を進めてこれを定率化すれば、図書館予算は安定し、毎年の事業計画に十分創意工夫を發揮するゆとりが生じてまいります。運営委員会における今後の御検討を要望しておく次第であります。

大学に籍を置く研究者にとって、1日もかわりなしに済まされない機関が附属図書館であります。専ら利用する者の立場に再び帰った私は、図書館がただ必要のために存在するだけではなくて、大学内の楽しく魅力に満ちた場となることを希望してやみません。

昔、咸宜園塾の教育で有名な広瀬淡窓は、「約言」という書を著して敬天の説を唱えました。ある人が、「人道は忠孝にて足れり、何ぞ更に敬天の説有るや」と問うと、淡窓は古人の詩句を引いて、

尋常一様窓前の月、纔（わずか）に梅花 有れば便（すなわち）同じからず。  
と答えております。美しくはあってもどこにも見られる窓前の月に対して、一枝の梅花をあしらったところに、淡窓の教えの魅力があったのであります。

館員の皆様が、画一的な日常の業務に対して、常に一枝の梅花を添える工夫をして下さいますようお願いし申しあげて、私の退任のあいさつといたします。

(教育学部教授)

## 名著講読の発足にあたって

須 鎗 和 巳

ドイツの代表的作家で、ノーベル賞を受賞したヘルマン・ヘッセ(1873-1962)は、またすぐれた読書家でもあった。ヘッセはその著書「世界文学をどう読むか」(高橋健二訳、新潮文庫)の中で、「今日の世間はやや書物を軽ろんずる傾きがある。活気のある生活の代りに書物を愛するなんてことを、冷笑すべき、価値なきことと思っている若い人々が今の世の中にはたくさんいる。彼らは、われわれの一生は、本なんか愛するには、あまりに短かすぎ貴重すぎる、とっている。そのくせ週に6回もカフェーの音楽やダンスで多くの時間を過ごす暇を見つける」と述べている。これは1929年の著書であるが、いつの時代においても変らぬ嘆きかと思われる。

徳島大学教養部が行った調査(1981年3月)によっても、学生が読書に充てる時間は極めて少く、購入雑誌の大部分は漫画であり、また蔵書数も貧弱(50冊未満のものが53.1%)であることがわかる。

最近の学生の論理的思考力が弱く、文章表現力に乏しいことの一因は、読書量の少なさにある。思考する方法、表現の仕方を直接教授することはむづかしい。それは、優れた先人の方法を学び、それを真似ながら体得する以外にない。そのためには、優れた作家、思想家、科学者らの遺産、すなわち名著に親しむことである。なお教養部における教育は、組織上の制約から多人数教育を余儀なくされており、教官と学生との接触交流の場が限られている。

この様な学生の弱点、教育上の欠陥を補う目的で「名著講読」の時間を設け、10人前後のクラスで教官と学生とが共に名著に親しみ、話し合いの場を持つことにした。授業は隔週2時間づつ、年間15回行い、2単位を与えることにしている。

名著講読を実施するため、全学の教官に御協力をお願いした処、多数の方々の御賛同を得て、

56クラスを開講することが出来た。担当教官には、その専門にとらわれず講読書を選定していただいた。その結果開講分野は人文・社会科学、自然科学、文学、芸術、随筆・評論の各分野にわたっている。受講生は新入学生の64%、605名にのぼり、計画通り実施することが出来た。ここに御協力をいただいた先生方に厚く御礼申し上げると共に、今後も全学の多数の方々の御援助をお願い致します。

ところで、前記教養部の調査結果によると、学生の「大学進学の原因」では、職業選択の有利性が第1位となっている。また教養部における授業科目選択の基準は、「単位がとりやすい科目」に集中している。さらに図書館利用の目的の1・2位は、「レポート作成のため」(82.8%)、「試験勉強のため」(72.3%)となっている。すなわち勉学・読書の動機が功利的に傾いている点が目立つ。これは、現代の社会的風潮の反映とも考えられるが、一般教育を担当しているものとしては、いささか寂しいことである。

ヘッセも前掲の書の冒頭に、「真の教養はなんらかの目的のための教養ではない。それは完全なものへのすべての努力と同様に、その意味をそれ自身のうちに持っている。……真の教養は、われわれの生活に意味を与え、過去を解釈し、恐れぬ心構えで未来に臨むようにわれわれを助けるものである」とのべており、教養へ達する最も重要な道の一つとして読書をあげている。

学生諸君も、教養部における勉学の目的が真の教養であり、それは人間形成すなわち自己完成への道を歩む際の道標となるものであることを理解され、一層読書に励まれることを切望いたします。  
(教養部教授)

## 附属図書館業務電算化検討部会からの報告

昭和54年6月業務電算化の波に乗り遅れないようにという附属図書館長の意向もあって、それまで個々で勉強していたコンピュータの知識を集約し、文珠の知恵とする意味から附属図書館員による「業務電算化検討グループ」が組織され、昭和56年3月に発展解消となるまでの間、

1. まず何からやるか
2. どのようなことがやれるか
3. その効果は
4. その為にはどうするのか

などの討議と共に、先行している大学への見学、そして報告された資料を使つての学習という形で進めて来ました。

その後昭和56年度に入ってから、検討グループの発展解消ということを受けて、より高度な検討、緊急を要する情勢に來ているという判断のもとに7月には「附属図書館業務電算化検討委員会要項」が附属図書館運営委員会承認されると共に、検討委員会の下部組織として館員による検討部会をつくり9月から部会での検討が開始されました。この部会での当面の課題としては、過去に示された案件に結論を出すこととあわせて最近普及のめざましい学術文献情報のデータベースから端末機を使つてオンライン検索のできるシステムへの対応をするため、情報検索用端末機を附属図書館(本館)に設置、蔵本分館では更新ということについて、経済効果のための利用予測、将来展望にたった機種を選定、また学内研究者へPRを含めての検索例によるデモンスト

レーションなどを進めて来ました。また、電算機の知識を館員全体にという主旨のもとに、ソフトウェアについての夏休みの期間に事務局情報処理課のお世話によってSE(システムエンジニア)を紹介していただき10日間にコボルゼネレーションからの一応基礎知識の講習会も開催しました。

昭和56年末には一応の結論を出して検討委員会へ報告して56年が経過しました。

これを受けて昭和57年度には附属図書館運営委員会において情報検索性端末機の設置、更新についての審議がおこなわれることになっております。

このような経過のなか、周囲の情勢も大きく動いて来ました。

昭和54年6月「今後における学術情報システムの在り方について(中間報告)」からはじまり、昭和55年度の「学術情報システム」構想の発表、更には昭和56年度に「学術情報センター設置調査概要」及び「学術情報センターシステム開発調査概要」の発表となり、文部省で進めているこの構想がいよいよ具体化に向けて急カーブを描きはじめて来たこと。

学内的には電子計算機センターに設置の電子計算機更新の概算要求にあたって、このシステムの中に附属図書館の業務を含めた要求というように昭和57年度要求分から変わって来て、昭和58年度についても図書館の業務用機種を分散処理が可能なシステムにした上で継続要求されております。

おかげで図書館としては単独で機種の選定その他諸業務から解放されましたが一方、センターの要求が採用された場合、直ちに対応できるように準備をしておくという必要にせまられて来ました。

検討部会として今後の検討課題としては、業務分析の見なおし、入力データの慎重な選択、利用者へのPRの方法というようなことが山積し、しかも急を要するものとなって来ているのです。

電算化にあたって有効利用のためにも、より迅速に、より正確に、より多くの利用者への還元ということを目指して今後検討を進めなければならないと思っております。

学内利用者の皆様から、より建設的な御意見、御希望がいただければ幸甚です。

(附属図書館 受入係長)

## 出版物をご寄贈下さい

最近、学内の学会等で出版している雑誌の論文複写依頼がふえておりますが、図書館に備付けてないものが多く、要求に応じられない場合があります。できましたら出版の際、図書館にご寄贈願ひ、広く利用させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

# 情報検索用端末機の設置と更新が決定

第二回附属図書館運営委員会で、情報検索用端末機の導入（本館）と更新（蔵本分館）が決定しました。

なお、常三島地区教官に対して、情報検索で利用するファイル（データベース）に対しての希望アンケートをお願いしました結果、次表となりました。

## 情報検索で利用するファイル(データベース)に対しての希望アンケート集計

(昭和57年6月15日現在)

表1 回答状況

学部等	配布部数	回答数	回答率%
教育学部	91	18	19.7
工学部	104	29	27.8
教養部	45	13	28.8
短期大学	26	6	23.0
計	266	66	24.8

表2 希望データベース

学部等	DIALOG			JOIS		
	人文・社会	理 工	計	人文・社会	理 工	計
教育学部	10	3	13		5	5
工学部		8	8		21	21
教養部	4	6	10	1	2	3
短期大学部	1	1	2		4	4
計	15	18	33	1	32	33

# コンテンツシート(目次速報)サービス拡大について

常三島地区で購読している外国雑誌のコンテンツシートの配布を決め、希望を募った結果、50名・262種類・267部の申込みがあり、昭和56年の91部と比較して3倍の増加となりました。





文献複写(枚数)

(昭和56年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
文献複写	教職員	52,721 (枚)	63,324 (枚)	116,045 (枚)
	学生	1,507	5,474	6,981
	その他	11,255	17,613	28,868
	計	65,483	86,411	151,894

相互利用(人数)

(昭和56年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
相互利用	教職員	387 (人)	988 (人)	1,375 (人)
	学生	31	158	189
	その他	390	1,679	2,069
	計	808	2,825	3,633

相互利用(件数)

(昭和56年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
相互利用	教職員	1,599 (件)	1,613 (件)	3,212 (件)
	学生	110	269	379
	その他	911	2,847	3,758
	計	2,620	4,729	7,349

参考調査(人数)

(昭和56年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
参考調査	教職員	2,377 (人)	3,552 (人)	5,929 (人)
	学生	1,598	1,732	3,330
	その他	52	9	61
	計	4,027	5,293	9,320

参考調査(件数)

(昭和56年度)

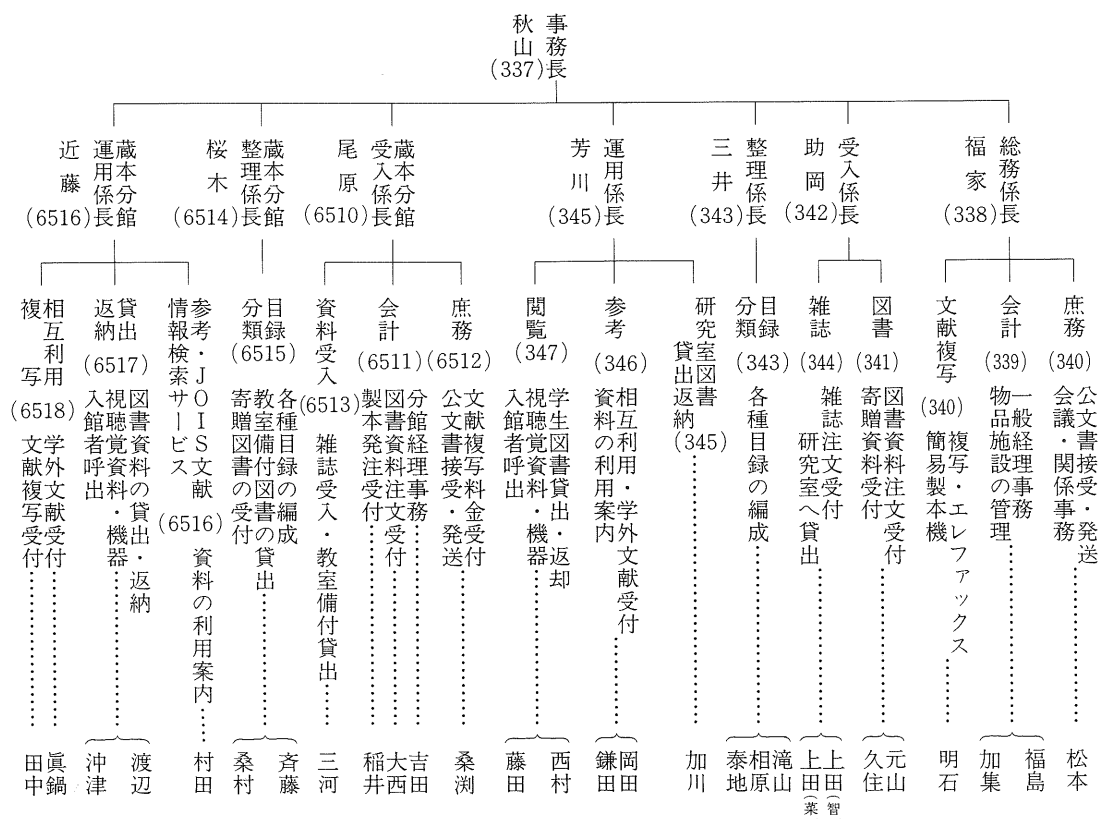
		附属図書館(本館)	分館	計
参考調査	教職員	3,581 (件)	4,141 (件)	7,722 (件)
	学生	1,876	1,875	3,751
	その他	56	9	65
	計	5,513	6,025	11,538

【附属図書館運営委員会委員名簿】

昭和57. 4. 2現在

所 属	氏 名	任 期	所 属	氏 名	任 期
図書館長	小林 茂	57.4.2~59.4.1	歯学部教授	高木 知道	57.4.1~59.3.31
蔵本分館長	高田 充	57.4.1~59.3.31	薬学部教授	塚谷 博昭	57.4.1~59.3.31
教育学部教授	本多 浩	57.3.1~59.2.29	〃 助教授	寺田 弘	57.3.1~59.2.29
〃 助教授	石井 愷義	57.4.1~59.3.31	工学部教授	杉尾捨三郎	57.4.1~58.3.31
医学部教授	名取 靖郎	57.4.1~59.3.31	〃 教授	浦川 和馬	57.3.1~59.2.29
〃 教授	松本 圭蔵	57.4.1~59.3.31	教養部教授	後藤 健次	57.3.1~59.2.29
歯学部教授	坂東 永一	57.4.1~59.3.31	〃 教授	八木 静夫	57.4.1~59.3.31

# 附属図書館事務組織図



## 会 議

附属図書館運営委員会(昭和56年度第6回～第8回)

○第6回 昭和56年12月7日(月)  
(於 蔵本分館)

### 議 題

1. 昭和56年度学生用図書購入費(追加分の配分について)
2. 昭和56年度外国雑誌購入費の配分について

○第7回 昭和57年2月1日(月)  
(於 附属図書館)

### 議 題

1. 館長候補者の選出について
2. 分館長候補者について
3. 昭和56年度予算節約額について
4. 図書館経費の中間報告に伴う定期刊行物経費の増加について

○第8回 昭和57年3月15日(月)  
(於 蔵本分館)

### 議 題

1. 附属図書館の情報検索用端末機の設置について
  2. 蔵本分館の情報検索用端末機の更新について
- 附属図書館運営委員会(昭和57年度第1回～第2回)
- 第1回 昭和57年4月26日(月)  
(於 附属図書館)

### 議 題

1. 附属図書館の本年度運営方針について
2. 昭和58年度概算要求事項等について
3. 徳島大学附属図書館資料の管理換に関する事務処理要領(案)について
4. 附属図書館の情報検索用端末機の設置について
5. 蔵本分館の情報検索用端末機の更新について
6. 常三島地区運営委員会世話人, その他について

○第2回 昭和57年5月24日(月)  
(於 蔵本分館)

議 題

1. 図書館資料の管理換の申し合せについて
2. 蔵本地区のリモート バッチ ステーションの設置について
3. 附属図書館の情報検索用端末機の設置について
4. 蔵本分館の情報検索用端末機の更新について
5. 昭和56年度附属図書館経費決算書について
6. 昭和57年度附属図書館経費所要額について

出 張

(昭和56年12月1日～昭和57年6月30日)

- 2月22日  
～24日 事務打合せ  
(於 名古屋大学附属図書館・東京工业大学附属図書館)  
出席者 総務係長 福家 健二  
蔵本分館受入係長 尾原 忠雄
- 3月10日  
～12日 事務打合せ  
(於 九州大学附属図書館・山口大学附属図書館)  
出席者 受入係長 助岡 君二  
総務係 福島 潤
- 4月6日  
～10日 昭和57年度新採用職員研修  
(於 高松第2地方合同庁舎)  
出席者 蔵本分館運用係 渡邊 章夫
- 5月5日～
- 7月29日 東京大学図書館情報学セミナー  
(於 東京大学附属図書館)  
出席者 蔵本分館運用係長 近藤 英子
- 5月6日  
～8日 第30回中国四国地区大学図書館協議会総会  
(於 白島会館(広島大学附属図書館))  
出席者 館長 小林 茂  
事務長 秋山欣之介
- 5月12日  
～14日 第18回日本医学図書館協会中国四国部会  
(於 鳥取大学医学部)  
出席者 蔵本分館整理係長 桜木 強
- 5月20日  
～22日 昭和57年度国立大学附属図書館事務部

課長会議

(於 東京医科歯科大学)  
出席者 事務長 秋山欣之介

6月16日

～19日 昭和57年度国立大学図書館協議会第29回総会

(於 松本市民会館・松本勤労者福祉センター(信州大学附属図書館))

出席者 館長 小林 茂  
事務長 秋山欣之介

人 事 往 来

(昭和56年12月2日～昭和57年6月30日)

- 新図書館長  
小林 茂 (薬学部教授) 57.4.2
- 前図書館長  
竹治 貞夫 (教育学部教授) 57.4.1  
(任期満了)
- 新分館長  
高田 充 (歯学部教授) 57.4.1
- 前分館長  
檜沢 一夫 (医学部教授) 57.3.31  
(任期満了)
- 運営委員会委員は9頁を参照下さい。
- 退職 畑 裕子 蔵本分館運用係 56.12.26  
" 東 秀樹 総 務 係 56.12.28  
" 笹井 知子 蔵本分館運用係 57.3.20  
" 澤口恵里子 " 57.3.20  
" 田村 和平 運 用 係 57.3.31
- 採用 明石 哲宏 総 務 係 57.1.5  
" 田中 賢恵 蔵本分館運用係 57.1.5  
" 渡邊 章夫 " 57.1.20  
" 宮内 明 運 用 係 57.4.12  
" 藤 早苗 蔵本分館運用係 57.4.12  
" 米田 圭子 " 57.4.12
- 配置換 桑渕 勇 蔵本分館受入係 57.4.1  
(薬学部会計係から)
- 転 任 猪原 幸子 工業短期大学部 57.4.1  
総務係 (蔵本分館受入係から)

来 館 者

(昭和56年12月1日～昭和57年6月30日)

- |       |  |   |
|-------|--|---|
| 2月4日  | 鳥取大学附属図書館<br>総務主任 山本 宗明氏                       | 総務課 会計掛主任 田中新太郎氏                                  |
| 〃 10日 | 宮崎医科大学教務部<br>図書館長 河田 政雄氏                       | 2月24日 筑波大学附属図書館<br>学術情報課長 石川 亮氏<br>視聴覚資料係長 袴田 次雄氏 |
| 〃 19日 | 豊橋技術科学大学教務部図書館<br>管理係長 田中 久義氏                  | 3月5日 岡山大学附属図書館<br>事務部長 本郷 太郎氏                     |
| 〃 22日 | 東京大学附属図書館<br>整理課 受入主任 遠藤 哲郎氏<br>総務課 庶務掛長 高橋 浩氏 | 〃 26日 大阪教育大学附属図書館<br>総務係 小室 安久氏                   |

目	次
就任のあいさつ…………… 1	附属図書館運営委員会委員名簿…………… 9
退任のあいさつ…………… 3	附属図書館事務組織図…………… 10
名著講読の発足にあたって…………… 4	会 議…………… 10
附属図書館業務電算化検討部会から…………… 5	出 張…………… 11
情報検索用端末機の設置と更新が決定…………… 7	人 事 往 来…………… 11
コンテンツシート(目次速報) サービス拡大について…………… 7	来 館 者…………… 11
図書館統計…………… 8	編 集 後 記…………… 12

## 開館時間

授 業 期		休 業 期	
月 ~ 金	土	月 ~ 金	土
9時~20時	9時~16時30分	9時~17時	9時~12時30分

## 編集後記

館長・分館長・一部附属図書館運営委員の交替がありました。  
 新・旧館長のあいさつ、及び附属図書館運営委員一覧表・図書館事務組織図を載せました。  
 情報検索用端末機を本館に導入・蔵本分館に更新が決まりましたので、この端末機を利用して参考業務の能率向上に役立てたいと思います。

編集：発行 徳島大学附属図書館  
 (〒 770) 徳島市南常三島町 2 丁目 1 番地 徳島 (0886) 23-2310 内線 (338)